



『太平記演義』序文の発憤説：公憤から私憤へ（小特集：近世文芸の作者の「姿勢（ポーズ）」：序文を手掛かりとして）

丸井，貴史

---

(Citation)

國文論叢別冊, 1:24-30

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/0100483228>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483228>



■小特集 近世文芸の作者の姿勢<sup>ポーズ</sup>——序文を手掛かりとして

## 『太平記演義』序文の発憤説

——公憤から私憤へ——

丸井 貴史

### 『太平記演義』序文への疑問

それが巻首にない書物の方が少ないと断言し得るほどに、近世期の刊本において、序文は当然あるべきものとして存在していた。<sup>1</sup>では、そもそも序文とはどのような役割を果たすものであるのだろうか。

小説の場合を例にとれば、たとえば浅井了意『伽婢子』（寛文六年（一六六六）刊）は、儒教・仏教・神道の経典がいずれも「靈理奇特<sup>きとくわいふかんん</sup>、異感<sup>いかん</sup>のむなしからざることををしへて、其道にいらしむる媒<sup>ま</sup>」<sup>2</sup>となっていることを指摘した上で、本作もまた「児女の聞をおどろかし、をのづから心をあらため、正道におもむくひとつ<sup>ををぬい</sup>の補<sup>おぎな</sup>」<sup>3</sup>となると述べる。また、井原西鶴『本朝二十不孝』（貞享三年（一六八六）刊）も、「生としいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎を通るべからず。其例は、諸国見聞するに、不孝の輩、眼前に其罪を顕はす。是を梓にちりばめ、孝にす、むる一助ならんかし<sup>3</sup>」と述べている。無論、任意に取り上げたこの二作に近世小説を代表させることはできず、序文の内容が作者の本心であると

いう保証もないが、作品を通して読者に何を伝えようとしているか、あるいは作品をどのように読んでもらいたいかを示すのが、近世の序文における一般的な書きぶりであったということは、右の二例から十分に窺われよう。

しかし、中にはその原則に当てはまらない序文を持つ作品も存する。そのひとつが岡島冠山の手になる『太平記演義』（享保四年（一七一九）刊）で、これは『太平記』の冒頭から巻九「山崎攻事<sup>や</sup>久我暇合戦事」の途中までを三十の章段に分け、板面の上段にはその漢訳を演義小説の体裁に仕立てたもの、下段にはそれを通俗軍談の文体に改めたものを、それぞれ配したものである。

通俗軍談とは、中国の演義小説を日本語に訳したもので、『通俗三国志』（元禄四年（一六九二）刊）や『通俗漢楚軍談』（元禄八年（一六九五）刊）などを筆頭に、当時たいへん広く読まれていた。したがって、『太平記演義』が通俗軍談の流行を背景として成立したものであることは疑うべくもないが、安易に本作を通俗軍談と同質の文芸とみなすことはできない。通俗軍談は中国語の小説を邦訳したものである点に需要があったわけだが、本作はもともと日本

語で書かれている『太平記』をわざわざ中国語に訳し、さらにそれを『太平記』の原文とは異なる日本語に訳し直したものであり、その性格を大きく異にするからである。少なくとも通俗軍談のように、歴史の一齣を平易な表現で読者に伝えることを第一義とする作品であったとは考えがたい。

では、作者は何を目的としてこの作品を著したのか。一般的な序文のあり方からすれば、そのことをこそ、本作の序文は示さなければならぬだろう。しかしそこには、作品の内容に関することはまったく記されていない。それならば、この序文の意味するところが何であるかを考えてみる必要がある。<sup>(4)</sup>

## 序文の内容

まずは序文の内容を確認しておこう。実はこれは署名に「通家門人長崎医士守山祐弘謹書」とあり、冠山の自序ではない。そのことの意味については後ほど検討することとして、序文は大きく三つの段落に分け得る構成をとっている。第一段落を以下に引く。夫レ演義ハ其ノ初メ元ノ羅貫中ニ起コリテ、而シテ今ニ距リテ猶ホ盛ンニ行ハル。蓋シ貫中ハ当時ノ賢才、衆ニ白眉シテ、而シテ功名如カズ。故ニ其ノ心中平ラカナラズ。遂ニ私ニ三國志演義ト忠義水滸伝トヲ著シ、適チ事ヲ彼ニ託シ、志ヲ己ニ舒ベテ、而シテ諸ヲ天下ノ人ニ示ス。<sup>(5)</sup>

序者は冒頭に、『三國志演義』『忠義水滸伝』の作者といわれる羅貫中の名を挙げる。彼は周囲に比してすぐれた才能を持つていながら名声を得ることができず、その不平や不満を仮託した寓言の書として、右の二作を書いたという。

続いて第二段落を要点のみ示す。

但シ吾ガ邦ノ学生、貫中ガ二書ヲ読ム者、僅僅トシテ教有リ。読ムト雖モ、惟タ能ク三國志ヲ解シテ、水滸伝ヲ解スルコト能ハズ。(略) 独リ吾ガ師玉成先生(筆者注：冠山)ハ、同郷長崎ノ人ナリ。少キヨリ華客ニ交ハリ、且ツ先師上野先生ニ從ヒテ、而シテ華語ヲ習学シテ、己ニ自ラ其ノ妙境ニ悟入ス。貫中ガ二書ニ於ケル、念ニ通ジテ曉シ析チ、解セザル所無シ。其ノ余、西遊記・西廂記・英烈伝等ノ諸家ノ演義小説モ、亦タ皆ナ搜抉シテ隠スコト無ク、而シテ訳文ト叙事トノ法ニ長ズ。(略) 然レドモ命薄ク運劣クシテ、未ダ始メヨリ一タビモ寸進ヲ得ズ。常ニ自ラ碌碌トシテ愚ノ如クニシテ、声利ヲ遺レ外ル。オヲ愛スル者ハ之ヲ嘆キ、能ヲ嫉ム者ハ之ヲ快シトス。

日本における羅貫中の読者の多くは、『三國志演義』のみを解し、『水滸伝』を解することができないという。両者はいずれも白話小説に分類されるが、前者は文言の要素が強く、いわゆる漢文の読解能力があればある程度は読解し得るのに対し、後者は本格的な白話文で書かれており、唐話学を学んではなければ容易に読めるものではないので、このように言うのである。一方、冠山は当時を代表する唐話学者であり、当然のことながら『水滸伝』をも読みこなすことができた。しかし、運拙くして名を挙げるができず、ついに名声とは無縁の生き方を選んだらしい。

最後に、これも若干の省略をした上で第三段落を引用する。

一日、先生喟然トシテ嘆ジテ曰ハク、吾レ臆隴ノ際、年将二老イントス。今若シ貫中ガ意思ニ倣ヒテ以テ平生ノ微志ヲ畢

へズンバ、則チ恐ラクハ必ズ復タ日有ルコト無カラン。遂ニ齋ニ入りテ毫ヲ操リ、吾ガ邦ノ名史太平記ヲ訳シテ演義ト為ス。其ノ書若干卷、直チニ太平記演義ト題ス。(略)果タシテ其ノ訳文ノ妙、叙事ノ明ナルヲ見ル。其ノ繁キ者ヲバ之ヲ葵リ、闕クル者ヲバ之ヲ補ヒ、訛ル者ヲバ之ヲ正シ、疑フ者ヲバ之ヲ決ス。一統シテ以テ大成スル者ナリ。(略)抑モ中華ノ演義ハ貫中ニ起コリテ、而シテ貫中ヲ之ガ鼻祖ト為シ、吾ガ邦ノ演義ハ先生ニ起コリテ、而シテ先生ヲ之ガ鼻祖ト為ス。

ここに記されているのは、冠山が『太平記演義』を執筆した理由である。冠山は羅貫中に倣つて演義小説を書くことを長年考えていたようで、羅貫中が中国演義小説の鼻祖であるように、冠山もまた本作によつて我が国の演義小説の鼻祖となつたと述べられる。

以上の内容をまとめると、この序文に書かれているのは、師の冠山が正當に評価されていないことに対する不満と、それにもかかわらず見事に我が国の演義小説の祖となつたことへの賞讃ということになる。

### 白話小説および通俗軍談の序文

内容だけを見るならば、この序文は門人の手になるものとしてさほど奇妙なものとも思われないが、『太平記演義』の周辺に位置する作品と比較してみると、その特殊なあり方が浮き彫りになってくる。

まずは序文の中で冠山の白話読解能力が讃えられていることに注目し、白話小説の序文を検討してみたい。詩文のみが価値ある

文学として認められていた中国において、明末以降、白話小説が陸続と刊行されるようになったのは、中国の文化史にとつて決して小さな出来事ではなかったが、そもそも白話小説は何を目的として書かれたのであろうか。試みに、代表的な短篇白話小説集「三言」のひとつに数えられる『古今小説』の序文を見ると、世間には文章の機微を理解する者よりも耳で話を聞く者の方が多く、それゆゑ小説は俗に通ずる人々に資するところが多い(大抵唐人ハ言ヲ選ビ、文心ニ入り、宋人ハ俗ニ通ジ、里耳ニ諧フ。天下ハ之レ文心少ナクシテ里耳多シ。則チ小説ノ言ヲ選ブ者ニ資スルコト少ナク、而シテ俗ニ通スル者ニ資スルコト多シ)ということを述べた上で、講釈師の話に人々が熱狂する例を挙げ、

小クシテ孝経・論語ヲ誦スト雖モ、其ノ人ヲ感ゼシムルコト、未ダ必ズシモ是ノ如ク捷ニシテ且ツ深ナランヤ。噫、俗ニ通ゼズシテ之ヲ能クセンヤ。

と、俗語であるがゆゑに人々の心を動かしやすいことが主張される。大木康によれば、こうした記述は『古今小説』に限らず多くの小説・戯曲に見られるようで、白話が庶民の警世や教化に有用なものとして捉えられていたことが理解される。すなわち、白話で作品を書くことの意味が明確に説明されているのだが、『太平記演義』の序文は、なぜ『太平記』を演義小説や通俗軍談の形式に改めたのか、その理由について何も語っていない。

では、通俗軍談の序文はどうか。『通俗三国志』における、著者文山の自序を見よう。

夫レ史ハ道ヲ載セテ鑑ヲ垂ル、所以ナリ。故ニ君臣ノ善惡、政事ノ得失、邦家ノ治乱、人才ノ可否、一トシテ焉ヲ録セズ

ト云フコト無シ。凡ソ史ヲ讀ム者ハ、讀ミテ其ノ忠ナル処ニ至リテハ、便チ自己ノ忠ト不忠トヲ思ヒ、讀ミテ其ノ孝ナル処ニ至リテハ、便チ自己ノ孝ト不孝トヲ思ヒテ、勸懲警懼ノ心ヲ忘レザルトキハ、則チ身ヲ修ムルノ要、豈ニ焉ニ外ナランヤ。<sup>(8)</sup>

一般論的な内容ではあるが、歴史を学ぶことの意義が端的に主張されている。そしてこの後には、作品の舞台となった三国時代についての所感が述べられ、『三国志演義』がその題材に選ばれた理由を窺うこともできる。

また、李下散人が『列国前編十二朝』を邦訳した『通俗列国志十二朝軍談』（正徳二年（一七一二）刊）の序文は、門人の中西兵なる人物の手になるものであるが、彼はここで、

夫レ書ハ人物ノ善悪、国家ノ成敗ヲ記シ、觀ル者志ヲ興起シ、義氣ヲ発セシムル所以ナリ。然ルニ漢語ノ簡確ナルヤ、列国ノ交紛ナルヤ、之ヲ編ムニ次第ヲ以テシ、之ヲ作ルニ和語ヲ以テセバ、脱読ノ士、童蒙ノ輩ニ至リ、必ズ志ヲ立ツル有ラン。此レ亦タ教導ノ一術ナリ。<sup>(9)</sup>

と、歴史がいかにか教訓たり得るかを説くとともに、演義小説を日本語に改めることの意義をも同時に示している。そしてそれは、明末中国の知識人たちが白話を用いて小説・戯曲を著したのと同様に、『脱読ノ士』や「童蒙ノ輩」の教化のためであったようである。

このように通俗軍談の序文は、歴史から得られる教訓やその有用性、さらには作品の舞台となった時代の解説などが記されるのが一般的で、それが一種の「型」であるといっても過言ではない。

この「型」は通俗軍談に限らず、たとえば『前々太平記』（正徳五年（一七一五）刊）の序文末尾に「若シ夫レ此ノ書ヲ讀ミ、而シテ治乱得失勸善懲惡ニ感ズルコト有ル者ハ、豈ニ鑑戒ノ一補ト為ザランヤ<sup>(10)</sup>」とあるように、歴史に材を探る作品全般に共通するものと思われるが、いずれにしても、『太平記演義』のように作者についての記述に終始する序文は、管見の限り他に例を見ない。

### 不遇意識と発憤著書

冒頭に述べたとおり、読者に対して作品の読み方を方向づけようとするものが序文であるとしたら、本作の序文は、羅貫中に倣って作品を書くという、冠山の執筆動機に注意を払うことを促すものであるといえる。序文を読む限り、冠山自身は自らの境遇を「碌碌トシテ」受け入れていたようであり、羅貫中と同様の意識を持っていたと明記されているわけではないが、彼が実は不遇を託っていたということ窺わせる資料も少なくはない。

そのひとつが、東京大学総合図書館所蔵『太平記演義』（<sup>(3)</sup>頁108）の識語である。これが何を根拠として、いつごろ書かれたものかは定かでないが、<sup>(11)</sup>ここには唐通事を務めていた冠山が、「訳士は卑官にて、彼我の通詞を役する而已にて、碌々として僅に五十年を過さんは有志の愧る所なり」と言つて職を辞し、儒学で身を立てようとしたものの、召し抱えられた萩藩においても「其職儒を以てせず通訳に役せら」れたため、「五斗米の為に腰を屈せんやと復辞し去」ったことが記されている。実際にこのとおりであったとすれば、冠山が鬱屈した思いを抱えていたであろうことは容易に想像できるが、その真否はひとまず措き、今は冠山が羅貫中

に重ねられていることの意味について考えたい。

羅貫中が自身の不平や憤りを作品に仮託したことがあえて記されている以上、冠山の執筆動機もまたそれと同様であったことが、この序文には暗示されていると解釈するのが自然であろう。それならば、「自ら碌碌トシテ愚ノ如クニ」していながらも、実はその心奥に静かな憤りを秘めていた冠山の姿が、ここには描き出されているということになる。すなわち本作は、『史記』「太史公自序」を淵源とする「発憤著書」の系譜に連なるものと考えねばならぬのである。

しかし、本来、羅貫中の「憤り」と冠山の「憤り」は、まったく性質を異にするものであった。

羅貫中の作品が「発憤」の書であることを述べた文章として広く知られているのは、李卓吾「忠義水滸伝序」であるが、そこには「施羅二公、身ハ元ニ在リテ心ハ宋ニ在リ。元ノ日ニ生マルト雖モ、実ハ宋ノ事ヲ憤ルナリ。是ノ故ニ、二帝ノ北狩ヲ憤リテ則チ大イニ遼ヲ破ルヲ称シ、以テ其ノ憤ヲ洩ラス。南渡ノ苟クモ安ンズルヲ憤リテハ、則チ方臘ヲ滅ボスヲ称シ、以テ其ノ憤ヲ洩ラス」と書かれている。「二帝ノ北狩」とは宋の徽宗と欽宗が金に捕えられた靖康の変、「南渡」とは宋が金に敗れて南遷したことをそれぞれ指すが、つまりは、宋が金に苦しめられたことに對する憤りが、『水滸伝』における遼征伐と方臘討伐に反映されているというのである。

すなわち羅貫中の「憤り」とは、自らの不遇に對する不平というようなものではなく、祖国をめぐる状況に對して向けられた公憤であつたということになる。実を言えば、『東西晋演義』という

演義小説の序文には「羅氏、生時二逢ハズ、才鬱トシテ展ブルコトヲ得ズ。始メ水滸伝ヲ作りテ以テ其ノ不平ノ鳴ヲ抒フ」という一節があり、不遇意識と『水滸伝』が関連づけられている例がまったくないわけではないのだが、文章の知名度は「忠義水滸伝序」に比すべくもない。その点に鑑みれば、『太平記演義』の序文は意図的に羅貫中の「憤り」を私憤に読み換えることを試みたものであつたといえるのではなからうか。そしてこの序文に關する最大の特徴は、著述の動機としての私憤を肯定的に捉えているところに存するのである。

近世中期において發憤著書の説が広く受け入れられていたことは、すでに中野三敏の指摘がある。中野は上田秋成『よしやあしや』（寛政五年（一七九三）刊）の末段に「彼土にては演義小説といひ、こゝには物がたりとよぶ。それ作り出る人の心は、身幸ひなきを嘆くより、世をもいきどほりては、昔を恋しのび（後略）」とあるのに注目し、秋成の文学觀のひとつに、物語とは「作者心中の憤りを發するところに書き出され」るものであるという認識があつたことを指摘した上で、

秋成がその「寓言説」の中で寓意のモチーフを「憤り」と定めるについては、享保以来の学芸界に充滿していた、老莊世を憤るの説が基盤としてあり、さらに寓言の書一般にその憤の説が及ぼされて、『伊勢物語』『源氏物語』の古物語から、中国の近代小説たる『水滸伝』に至るまでがその範疇に入るに及んでいる当代の文芸觀の影響は甚大であつたと断言できるのである。

と述べる。ただし注意しなければならないのは、これに続けて「發

憤説の主眼は「何を」憤るかにある。当代学芸界の憤説の主張は、皆「俗を矯め、世を憤る」のであり、これはすなわち眞の仁義の道が行われざるを嘆くところにあつた」と指摘されていることである。これを踏まえれば、『太平記演義』の序文が羅貫中と冠山の私憤について述べた上で、それを作品執筆の動機として堂々と宣言しているのが、いかに画期的なものであるかが理解されよう。中野は先ほどの引用に続けて、崇徳院の個人的「憤り」を描いた『雨月物語』（安永五年（一七七六）刊）の「白峯」を例に、「秋成において初めて個人の内面的感情を内容とする「寓言」が登場することになった」と述べるのであるが、『太平記演義』の刊行は、それより半世紀以上も前のことなのである。<sup>16)</sup>

### 『太平記演義』序文の「方法」

歴史に材を採る作品の序文は、歴史を学ぶ意義や歴史から学び得る教訓について記されるのが一般的だと先に述べたが、それは「公」の論理に基づいて歴史を捉えようとする姿勢に基づくものである。一方で、本作の序文は冠山という「私」のあり方を読者に訴えるものであり、それゆえに、作品そのものは冠山の学識を保証するものとしての機能を担わされている。すなわち、序文が作品の性格を規定してしまっているとも言い得るわけだが、それだけの力を持つ以上、序文の主張の正当性もまた問われることになる。

そこで大きな意味を持つのが、この序文が冠山の手になるものではないということである。一般的に、自序においては謙遜の態度を示すのが通例で、たとえば前出の『通俗三國志』序文には「俚

詞蔓説、以テ蘊奥ヲ発スルニ足ラズト雖モ、幼学ヲシテ解シ易カラシメント要スルノミ」という謙辞が見られる。それに対して冠山の『通俗皇明英烈伝』（宝永二年（一七〇五）刊）に附されている他序（版元の林義端の手になる）は、作者を「能ク中華ノ俗話ニ通ズ。亦タ一奇材ナリ」と讃えている。

すなわち、仮に冠山が本作の序文を書いた場合、冠山は自らの才能について謙遜せざるを得なくなり、執筆の動機たる「憤り」の意味が失われてしまう。しかし他序であれば、冠山に代わって作者の不遇を強く憤ることができ、『太平記演義』の序者が守山祐弘なる門人であることの意味は、この点にこそ求められるのではなからうか。序文の内容に冠山自身がどこまで関与していたかは推測の域を出ないが、結果として、他序という形式が自己主張の方法として効果的に用いられていたことになる。

先に見たとおり、本作序文における冠山の「憤り」の<sup>17)</sup>姿勢は、「発憤著書」における「発憤」の意味を大きく転換させるものであった。既存の価値観や通念を作品の中で転倒させるのは、白話小説にしばしば見られる手法であるが、冠山も「発憤」という概念について、大きな揺さぶりをかけている。そしてそれが、「公」から「私」への価値転換を志向したものであったのは、いかにも俗文芸の担い手らしいあり方ではなからうか。儒者として身を立てられなかったことについて、不遇の思いをたとえ抱いていたとしても、自身が歩んできた道に対するささやかな誇りがなかったわけではないだろう。

注

- (1) 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店)「序」の項には、「わが国の近世期板本には、草双紙など片々たる冊子に至るまで序文が備わっている」とある(高木元執筆)。ただし、もちろん例外もある。
- (2) 引用は国文学研究資料館所蔵本(ナ4-952-13)による。
- (3) 引用は国立国会図書館所蔵本(ナ19)による。
- (4) 本稿の内容には、拙稿『太平記演義』の作者像―不遇者としての実像と虚像―(『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』汲古書院、平成三十一年)と重複するところがある。
- (5) 引用は愛媛県立図書館所蔵本(N33.43.1-5)による。原漢文。
- (6) 引用は国立公文書館所蔵本(309-0007)により、私に書き下した。
- (7) 大木康「明末士大夫による「民衆の発見」と「白話」(『馮夢龍と明末俗文学』汲古書院、平成三十年)。
- (8) 引用は筆者架蔵本による。原漢文。
- (9) 引用は国文学研究資料館所蔵本(ナ4-224-1-19)による。原漢文。
- (10) 引用は国文学研究資料館所蔵本(ナ4-140-1-20)による。原漢文。
- (11) 『先哲叢談後篇』(文政十三年(一八三〇)刊)巻三と共通する記述もあるが、そこには見られない情報もこの識語には記されている。
- (12) 引用は和刻本『忠義水滸伝』(京都大学附属図書館所蔵本(ナ4)子(一))所収「読忠義水滸伝序」による。原漢文。
- (13) 引用は国立中央図書館(台北)編『歴史通俗演義』に影印所収の世栄堂本により、私に書き下した。

- (14) 中野三敏「寓言論の展開」(『戯作研究』中央公論社、昭和五十六年)および「秋成の文学観」(『十八世紀の江戸文芸―雅と俗の成熟―』岩波書店、平成十一年)。以下の引用は「秋成の文学観」による。
- (15) 引用は筆者架蔵本による。

- (16) 無論、「白峯」は崇徳院という作中人物の「私憤」を描いているのであり、『太平記演義』とは「私憤」の性格が異なる。それを承知の上で、ここでは『太平記演義』における「憤り」の画期性について述べているのである。

- (17) 引用は盛岡市中央公民館所蔵本による(国書データベースにて閲覧)。

- (18) たとえば『警世通言』巻三「王安石三難蘇学士」において、批判的に評されることの多かった新法党の王安石が人格の優れた知識人として描かれ、旧法党の蘇軾が知に驕る人物として造型されたことなどが想起されよう。

【附記】本稿は科学研究費補助金(23K12086)および専修大学日本語日本文学文化学会個人研究助成金による成果の一部である。

(まるい たかふみ/専修大学准教授)